

「分割法」考案

——プラトン後期対話篇への視点——

一 問題の由来

小池 澄夫

プラトンの思考が展開される重要な場面のひとつに

(α) 感覚的パースペクティヴの移動に左右されない自己完結的なもの、と

(β) 感覚的パースペクティヴに相関的・相対的なものとの対比がある。⁽¹⁾

前期対話篇では、「Xとは何であるか」の問が、ソクラテスの吟味論駁を通して、対話人物を「非知」の自認に追いつめる前座として、この対象領域の区別が語られる。(α)グループの、木、石、指、鉄、銀などに関しては、人々の言葉と行動は一致して同じところに向かうが、しかし(β)に属する正・邪、善・悪、美・醜は、見解の相違を露呈させるのみならず、殺戮の動機すらもなすほどに、われわれの生に対し破壊的に作用する何ものかを曳きずっている。たとえば、「正義」。それがいかほど強く現世の制度によって固定されている場合であっても、異議申し立てにたえず晒されることを免れえない。しかも、この領域ではたんに一個の思惑が普遍性を標榜し、「知」の擬態をとることによって、かえってわれわれの「非知」は蔽い隠され(知らないのに知っていると思ひこみ)、経験が経験として熟成す

ることがない。「洞窟の囚人」が繋がれているこの奇怪な情況を照射することに、まずソクラテス、プラトンの仕事があった。

想起（アナムネーシス）説は、このような場面で、幾何学の方法と対象の位相を参照し、不可知論の呪縛を断ち切るうとした試みである。⁽²⁾ 実際のところ、(α)、(β)の隔絶が解消される契機は、すでに前期対話篇『エウテュブロン』（7B-D）に予想されていた。大・小、軽・重は、感覚の状況に相対的であるという点で(β)に属するが、測定技術を導入すれば確定することができたのである。しかし、そのことが数量のカテゴリーに局限されるのではなく、全面的な世界解釈としての体裁を整えるためには、知_{II}想起が、「事物の全本性は同族的な連鎖をなす」（『メノン』81D）というテーゼを内包しなければならなかった。そして、想起説の指し示すもうひとつのテーゼ、「感覚の対象は純粹な思惟の働きによって観られる対象の似像である」（『パイドン』72B-77A）⁽³⁾、とともに、その全き合意は、ヘイデア_{II}原範型（パラダイグマ）論とディアレクティケー、すなわち存在と知の究極に位置する〈善〉のヘイデアへの途とに展開し、「太陽」、「線分」、「洞窟」の三つの比喩（『国家』Vol. VI~VII）に集大成される。

続いて『パイドロス』（259D-260C）で、ディアレクティケーが、「ものごとを、その自然本来の性格に従って、これを一つになる方向へ眺めるとともにまた多に分れるところまで見る」能力として熱望されているのもまた、(α)、(β)の対比というこの基本的場面（263A-C）の延長においてである。そしてここに、『国家』以降の、わけても『ソピステス』、『ポリテュコス』、『レポス』など後期対話篇の骨格をなす新機軸が登場している。すなわち、「自然本来の分節に従って、種々の形態（*eón*）に切断する」ところの「分割」（*diakipéris*）の方法がそれである。

分割は、「多様にちらばっているものを綜観して一つの相（*μία ἰδέα*）へとまとめる」ところの「綜合」（*synagōgē*）を前提し、これと補完関係にあるものとして提示されている。しかしながら、その多から一への方向は、もはや〈善〉のヘイデアへの上昇を指してはいない、という解釈がほぼ定説化している。⁽⁴⁾ 確かに、ここで一から多への折り返しが分

割の手續きとして表面化したのは、〈善〉のイデアを括弧にいれ、それへの上昇を遮断したがためであるように思われる。実際、『国家』におけるディアレクティケーの、「万有の始源を把握したうえで、こんどは逆に、始源に連絡し続けるものをつぎつぎと触れたどりながら、最後の結末にまで下降していく」(511B) 途は、上昇の異常な困難にあつてほとんどプログラム化が不可能であり、方法というよりむしろ哲人王のノブレス・オブリジュの理念に吸収されている。してみれば、『パイドロス』で分割が総合と同時的に構えられているのは、やはり後期的特徴といつてよいだろう。だがそうすると、プラトン後期のディアレクティケーは「類・種のリンネ的分類」とほとんどかわるところがないのではないか。

エピクラテスは、プラトンのアカデメイアで動物の生態や栽培植物の品種などの分類が熱心に討議されていたことを伝えている。⁽⁵⁾しかしそれは、この喜劇作家にとっては格好の揶揄の材料だったとみえる。対話断片のみが現存するエピクラテス作品の語り手は、彼の目撃した「異様な情景」を話してきかせる——アカデメイアでは一群の若者が瓢箪 (kaloskirtis) の系統を定義しようと黙想にふけていた。相当な時間が経過した後、かろうじて少数の者が発言するに至ったが、その答たるや、曰く「まるい野菜」、曰く「自生の野草」、曰く「果樹」という代物で、傍らにいたシケリア島人のさる医者は呆れ、嘲弄の意を体して、放屁に及んだ、と。このような滑稽描写に凝った作者の眼には、分割法は、自明な対象について空疎な言辞を連ねるものと映ったのかもしれない。いずれにせよ、これでは分割法がかつては哲学そのものと同定されていたディアレクティケーの内実を継承しているとは思えない。せいぜい哲学の初心者向けの予備学習にすぎない、という意見⁽⁶⁾もでようというものである。

エピクラテスからさらに時代をくだって、伝承説話の世界に踏みこむと、いっそう辛辣な作為の手がはたらく。「人間とは二足の、羽のない動物である」という「プラトンの定義」を聞きつけたディオゲネスは、雄鶏の羽を筆⁽⁷⁾て、「これがプラトンの言う人間だ」と愚弄した。この「人間定義」は、おそらく『ポリテイコス』(286B)の「人間

の支配に服する動物」の分割からとられている。水棲動物（湿）／陸上動物（乾）→四足類／二足類→有翼（家禽）／無翼（人間）、というその分割では、むしろ「人間」の包括的な定義が企てられているわけではない。それは人間の、家畜と神とへの分裂（分割）を示すことにより、次に政治支配の発生源に遡る「宇宙の逆転」のミュートス（268D-274E）を準備しているのである。

このたぐいのカリカチュアは、分割法が運用される全体の文脈から遊離してはじめて生じる、ということは容易に察知される。しかしまず肝腎なこととして、分割法の現場に立会ってその仕組をみきわめておかねばならない。そして、その調査を通して中期対話篇で一応の確立をみたイデア論との結び目に探りをいれ（第二・四章）、最後に『パルメニデス』の「イデア論批判」の意図を照らしあわせる（第五章）、これを考察の今後の方途としたい。プラトンの後期への転機をなすとされるこの対話篇に、もし反イデア論が有効なたちで含まれているとすれば、想起説から「イデア」原範型論に至るプラトンの思考の行程は破棄されねばならない。〈善〉のイデアは括弧に括られたのではなく廃絶されたのであり、ディアレクティケーの概念に重大な変更がなされたのである。それ故、後期プラトンを問題にするとき、『パルメニデス』を避けて通ることはできない。

二 分割法の仕組(一)

——直観と発語装置

最初に、『ソピステス』(219A-221C)の「釣師」の分割をとりあげる。もともとこの分割は、「ソフィスト」の分割に進む前の稽古台とされているのであるから、分割と総合の具体的役割をみるための好個のモデル例ともなるはずである。その大筋の方策は、釣師を魚釣りの技術という機能的な場に移しかえ、「……で（もって）……を……する」という記述枠に絡めとろうとするものである。これに即して次に示すと——⁽⁸⁾

(1) 「どのような動作か」に

技術→製作／獲得→交換／捕獲→闘争競技／狩猟、までの分割が対応し、以下、

(2) 「何を目的・対象とするか」に

狩猟術→無生物の／生物（動物）の→陸上動物／水棲動物→鳥獣／魚獣が、

(3) 「どのような手段でか」に

漁→罾い込む／打って傷つける→篝火漁（夜）／釣漁（昼）→鉛漁／魚釣りが対応する。

分割法の基本操作は、分割の対象Xが潜む領域をあらかじめ大きく設けて、類似の中に対立的差異を見いだし不在の領域を切り離すことにある。この操作の反復によって、対象Xへの照準が絞られていく。「魚釣り」もこうして漸次、相似系から分離されてその固有の姿を現わすのである。

ここで提示された分割の順序はそのまま辿るべき筋合いのものであって、それを無視してディオゲネス流の難癖をつけてはじまらない。たとえば(2)の狩猟術から魚漁までの分割は、あくまで狩猟の獲物の分割であって、全般的な動物分類ではない。分割法の熟練者（エレアの客人）の指導により、弟子（テアイテトス）はさしだされた階梯をひとつずつ踏み固めていくことによって、思考の対象を引き寄せ、思考の明瞭化を経験することになる。

ただ、このように受け手の観点だけに固執して分割法を見ると、総合の役割がどうしてもかすむ嫌いがある。そこで次の方途として、分割の端緒を想定し、分割の構成を辿りなおしてみる。まず、製作技術／獲得技術の分割はどのようなにして可能になるか。この間は分割の骨組に直観の肉付けを要求することであり、自ずとそれは総合の働きを喚び出すこととなるろう。

さて、この分割はあらゆる技術を遺漏なく包摂しようとしたものではない。したがって、技術全体を均等に眺め渡すことにこの分割の端緒があるのではない。むしろ、ここで言う「技術」の含みは、「……で（もって）……を……」

する」という動作記述の空白を埋める確定項が存在する、ということではないか。⁽¹⁰⁾ だとすれば、それは動作・機能の自然本性(nature)と言ってもよいのであって、「魚釣り」の分割の発端というより、一般に分割が成立する基本的な場面を指している。では、「魚釣り」の分割はどこではじまるのか。

最初に設定された対象領域は、技術全般のそれではなく、農耕、牧畜、狩猟、製造加工、商売、知識の修得、芸術などの活動を包括する、いわば「存在の獲得」とでも言うべき領域である。さて、このような方向づけを可能にするものは、「魚釣り」が何であるか、の予断以外にあるまい。そしてその予断がどのような形で抱かれるにせよ、魚を取る、こと、という認知を含まなかった、とは考えられない。このような想定のもとで分割全体の見通しがつけられる。すなわち、続いてこの「取る」という動作が何であるかについて直観的な内実を確保して「存在の獲得」に拡張し、次いで、「それによって手もとにもたらされるものが先立って存在していたか否か」という差異をメルクマールとして、「獲得」の相を、「製作」との対比において、分離する。ところでこの分割は、同時にまた、一方で農業、製造業、畜産、芸術を製作技術に、他方で商業、狩猟、競技試合などを獲得技術に綜合することである。

したがって、「多様にもらばっているものを総観して一つの相へまとめる」ところの綜合が働く場合は、次のように整序されよう。

- (1) 多数のXの事例を観察して、その共通の相へまとめる(最初の直観)。
- (2) Xとよく似た、X以外の多くの動作を一括し、その固有の相へまとめる(拡張)。
- (3) 分割と同時に進行する、分割の裏操作。

ここで綜合を(2)の拡張の場面に限る解釈者達は、綜合が分割の先行条件をなすという先入見に縛られ、しかもその徹底を欠いている。確かに、分割は綜合を前提する——それ故(2)も(1)を前提する——けれども、しかしそれは(3)を排除するものではない。もっとも(1)については、それが分割法の運用に際して表立って現れない、という点に若干の懸

念がつきまとう。しかしながら、(1)はもともとそのままでは言表する手段がないのであって、(2)、(3)に媒介され分割という形をとることによってロゴス化を果たす、とみる方が実情に適っている。つまり、分割法は一種の発語装置である。『バイドロス』でソクラテスがあれほど熱烈に分割法を求めたのは、「語る力、知る力を得るため」(200B)であった。

また同じ対話篇における真実在の想起についての記述(209B-C)は、明らかに綜合の多から一への方向と重なり、(1)を支持するものである。

「人間がものを知る働きは、人呼んでエイドスというものに則して、行われなければならない、すなわち、雑多な感覚から出発して、思考の働きによって総括された単一なものへと進み行くことによって行なわれなければならない。」

このように、綜合とイデア想起との連絡が確認されるならば、分割法は(弱い)想起にはじまり想起を強化する方法である、と行うことができる⁽¹²⁾。しかし、この問題は分割法の適用される対象の存在論的身分の見きわめに、そして最終的にはプラトン後期のイデア論の解釈に依存するので、決着は先に延ばしておく。

いずれにしても、分割法からその直観的側面をはずすことはできない。アリストテレスは分割法を「脆弱な三段論法」⁽¹³⁾と評したが、それは決して欠陥ではないだろう。「自然本来の分節に従う」(『バイドロス』205E)と云うのは、「分割の部分とエイドスとの一致」(『ポリティコス』262B)を意味するところの、分割法の準則は、綜合の機微に属する事柄であって、シネクティックな論理の宰領できる分野にはない。たとえば、「人間」全体をギリシア人／バルバロスに分ける分割がこの準則に違反するとみられるのは何故か。『ポリティコス』(302A sq.)はおおよそ次のような難点を枚挙している。

- (a) バルバロスが広範にわたる過ぎて、分割された二つの部分の比率が極度に不均衡である (262A)。
- (b) バルバロスには、言語・法習を異にしそれぞれに閉じた無数の種族が含まれ、全体として一つの民族 (tribe) を構成するものではない (262D)。
- (c) この分割は多分にギリシア人の恣意に依拠している。バルバロスⅡ非ギリシア語族は、ギリシア語の内部にしかない (263D-E)。
- さてしかし、(c)はともかく、(a)、(b)は結局のところ何を言わんとするのか。(a)は「分割に際して、人間からただちにギリシア人にまで進んではならず、その中間に介在するクラスを確認していかねばならない」という指示を出しているのだろうか。だが、小部分を切り棄て大きな部分を残す、といった分割の途は必ずしも禁じられてはいない (265A)。また(b)は、バルバロスすなわち非ギリシア人のごとき「否定的特徴だけでは一個のクラスは構成されない」という原則を言うのだろうか。しかしそのような原則は、嚴格に適用すれば、ほとんどの分割を不可能とするだろう。しかるに実際には、一例を挙げると、角をもつ動物／角のない動物、という分割がなされている (265C)。この分割が許されるのは、すでに分割の対象が陸上歩行の家畜から家禽を除いた集合にまで絞られ、しかも「角のない動物」によって指されているもの(馬、驢馬、騾馬、豚)が明らかだからである。しかし、これと同じ差異を動物全体に適用することはできない。その場合には、分割のそれぞれの部分に綜合が働かず、空虚な分割となるからである。
- すなわち、元に戻せば、バルバロスは、(a) 外延的にも、(b) 内包的にも、無限定で、明確な輪郭、つまりはエイドスをもたないのである。「非ギリシア人」というだけでは漠然たる否定にすぎないし、また「未開野蛮」として一括するのも恣意の域を出ない。それは(c) 名辞の異に囚われた無知のもたらす仮構である。要約するに、ギリシア人／バルバロスは分割ではなく、ギリシア人を何か空虚な——綜合的直観を欠いた——拡がりに対置した、というにすぎない。

分割は総合によって支えられ、そして総合は分割によって言表化され吟味の対象ともなる。その結果、ディオゲネスが羽を筆りとられた鶏をさげて現れるというのなら、もはや歓迎するしかない。

三 分割法の仕組(二)

——浄化もしくは選別

しかし分割法の全貌はまだ見えていない。ここまでは分割法の基本操作を、同質的なもの間における差異の発見という側面から見てきたが、しかし「分離の仕事のなかには」、すなわち、また分割のなかには、「より良いものからより劣悪なものを引き離す仕事」もあるからである(『ソピステス』226D)。事実、ここで展開されている「ソピスト」の分割(6)の意味を詰めていくと、分割法の選別・浄化というもうひとつの側面に逢着するのである。

この分割(226B-231B)は、ソピストの技術を、分離の仕事に属する浄化技術の領域のなかにたずねて、「知らないのを知っていると思いきむ種類の〈非知〉を論駁によって除去し、魂を浄める人」とソピストを定義する。しかしこれは疑いもなくソクラテスその人を指している。実際、プラトンは、それを「ソピストと呼ぶのはためらわれ」とエレアの客人に言わせることによって、(1)~(5)の「ソピスト」の分割(221D-226A)との重大な差異を匂わせている。とすれば、分割(6)に負わされた意味は何なのか。

考察の手順としてまず、(6)に先立つ分割図式を瞥見して、その全体としての意味を考えることから始めよう。

- (1) 報酬を受け取って金持の子弟を狩猟する者(狩猟術)。
- (2) 魂のための学識を扱う通商業者(交換術)。
- (3) 同じく小売業者(交換術)。
- (4) 同じく自作販売者(交換術)。
- (5) 討論術を専門とする言論の選手(闘争競技術)。

これらの分割は、「魚釣り」の分割で透かし出された技術の枠組を利用し、複雑多岐にわたるソフィスト像を明確な描線で定着させることによって、ソフィストの統一的把握のための材料を提供している、とみられる。たとえば分割(1)は、富裕な名家の子弟が、ソフィスト¹⁵狩人によって、黄金を背負った温和しい若い獣のごとく扱われていることを暗示している。

さて(1)~(5)には、総合の準備とならんで、もう一つの意味がある。細かく見れば、(5)もまた「討論の技術の専門家のなかの、金を儲ける種族」であり、獲物は金銭にはかならない。したがって、これらの分割には、いずれも「金銭の獲得」という共通項があり、一括は容易であると思われる。しかし、分割(1)~(5)は全体として、そのことの不可能を示しているのである。なぜならば、「金銭の獲得」がソフィストの統一的な相だとした場合には、一方で、(2)、(3)、(4)が交換術に、他方(1)、(5)が捕獲術に属するという事実が、交換／捕獲の分割に強く抵触するからである。同一のものが分割の排他的な両方の部分に属することはできない。それ故、多様なソフィスト像はあっても、唯一のソフィストなるものは、この場合にはありえぬこととなる。

このように(1)~(5)の総合は、実は極めて困難であって、それらの同一性は何か或る別のものとの差異によらなければ見えてこないのである。かくて分割(6)の登場の手柄が整う。そして、論駁によって〈非知〉を自覚せしめ、「ただほんとうに知っている事柄だけを知っている」と思い、それ以上のことはそう思わないような人間にしてやる」(300D) ソクラテスとの対照において、「徳を授けると公称し(1)」、「徳に関する言論と学識を扱い(2)、(3)、(4)」、「正・邪・善・悪の問題で論争する(5)」とこのソフィストの姿が一つの形に凝縮する。

ただし、ソフィストに対して異をたてるものが、何故ソクラテスでなければならぬのか。ソクラテス的な吟味論駁は、〈非知〉の確認の向う側に〈知〉を前提し、それを不断に追求するものでなければ、対話の相手を自家撞着に陥れる技量を誇示するソフィストの間に紛れこみ、ひいては断罪もされることとなる。しかしソクラテスはこのよう

な〈知〉という基準との隔たりを照らすことにより、〈知〉の擬態をとるソフィストの群から救出され、同時にソフィストはソクラテスの要素の除去によって、偽りの知者の相貌を映し出されることとなる。したがって分割(6)は、分割(1)から自身を選別し、最終分割(7)を残す差異そのものである。それ故また、分割(7)はその核に真／偽の分割を抱えこみ、分割そのものの根拠に逆行し、「思惟の働きを通じて、あるものの輝かしい姿をつねに静視する」哲学者(254A)を望見させねばならないのである。

事情は『ポリティコス』において、より鮮明化し、その「政治家」の分割は選択・浄化にほかならぬことが黄金の精錬に喩えられている。

「〔黄金精錬の〕あの職人達もまた、まず第一には、土や石など多くの不純な夾雑物を選別する (*κρoφαίνουσι*)。それが済むと、黄金と親近関係にある貴金属、ただ灼熱の火によってのみ分離される銅や銀が残り、ときには白金がでることもある。これらをくりかえし、試金石にかけ、熔かし、やっとのことで分離すると、そのときはじめて『純金』が紛れもないそれ自身の輝きをわれわれに見せるのである。」(303D)

ここで貴金属に相当する「雄弁」、「軍事」、「裁判」の技術を政治技術から分離する仕事の困難が強調されているが、実際にはそれは誇張で、事は比較的簡単に終っている(303E-305E)。むしろ、不純物を洗い落とす仕事に『ポリティコス』の努力の大半は傾けられている、と言ってよい。

すなわち、「政治家の周囲に蝟集し、人間集団の養育に携っていると称する連中をすべて排除し、政治家〈そのもの〉の純粋な形を明らかにする」という戦略がたてられて(268C)以降、「宇宙の逆転」のミュートス(268D-274E)、範例論(277A-279A)、「機織術」の分割(279A-283A)、測定術の分割とディアレクティケーについての議論(283B-287B)というように、ときに迷路の旅にも似た長い遍歴を続けて、政治技術からその補助原因(必要条件)にすぎないもの

を次々と切り離していったとき、ついにそこに異形の怪物の群が出現する。

「人の身でありながら、多くの者は獐猛な獅子やケンタウロス、またその種の怪獣に似かよい、一方また極めて多くの者はサテュロスに、また懦弱で狡猾な獣に似ているが、おたがい変幻自在に姿をとりかえ、力を交換しあつゝゐる」(291A-B)

この怪物こそ、いわゆる政治家の正体にはかならず、権力闘争にあげられる党争家の赤裸の姿である。そして最大のソフィストと称されるかかると幻術師から「政治家」を選別するプラトンの基準は、ここでも正・邪、善・悪の〈知〉なのである(292B-293E)。してみると、この分割の基底には依然、『国家』篇における哲人王の原型が働いている、ということが強く示唆される。

さらに、神的な狂気を放縦な欲望から選別し讃える『パイドロス』の「エロース」の分割を可能にしたのは、「魂の転生」のミュートスであり、その骨子を構成する「魂の不死」、「原範型アイデアの存在」、「想起」の思想は、プラトニズムの精髓である。

したがって、選別的分割にあつては、中期対話篇で形成されていったアイデア論が、その根底に作動することによって、分割を可能にする差異が透かし出されてくるのである。次に、分割法の根本前提がアイデア論にあることをもって全体的な文脈から確認しよう。

四 分割法の仕組(三)

——実験的比喩(*παράδειγμα*)

そこであらためて分割法の登場する全体的な脈絡を辿っておこう。『パイドロス』(263A sq.)は分割法の適用に先立って、一般に言説によって虚偽の隠蔽工作がなされる領域を確認している。それは——

(α) 「鉄」とか「銀」とか、その名を口にするとき、すべての人が同じものを念頭においているような事物の領

域、ではなく、

(β) 「正しい」とか「善い」とかのように、同じ言葉を用いてもめいめい勝手なことを思い浮かべ、一つの見解に対して、たえず異議が申し立てられる領域、である。

したがって、議論の対象を明確にするために分割と総合の手続きが要請されるのは、当然、問題が(β)に関わる場合であった。しかるに、『ソピステス』における「釣師」、『ポリティコス』における「機織術」はいずれも(α)に属するにもかかわらず、分割法が適用されている。この相違はどこで生じたのか、をまず考察の糸口としよう。

『ポリティコス』(385D-286A)の、(α)、(β)に関する記述は、やや錯綜しているものの、大意は明白である。

(α) 存在するものの一方のクラスは——その自然本性として——わかりやすい感覚的似像をもっている⁽¹⁶⁾ので、この種の事物について「何であるか」と問われた場合、面倒な定義を避けて簡単に披露してやろうと思うなら、この似像をして語らしめることができる。

(β) 他方、すぐれて壮大かつ貴重なもののクラスには、一目して瞭然というたぐいの似像がない。

若干これに補足しておく、ここで(β)では感覚的似像が自然本来的にない、ということが言われているのではなく、誰もが一致してその似像だと指させるものがない、ということである。(β)の似像は喩えて言えば、「美しい原物に似ているように見えても、それは卑しい視点から見ているためで、実は人がそれだけ壮大な対象を充分に見てとる力を得たならば、似ていると称されるその当のものに似ても似つかぬもの」(『ソピステス』286B)と化す。一方また(α)は、感覚される物体そのものではなく、あくまでそれを似像とする原範型(パラダイグマ・イデア)である。つまり、原範型は事象の全域にわたって想定されているのである。

この意味で、(α)、(β)は決してカテゴリカルな存在論的区分ではない。あるのはただ、似像の利用ができるか否かの、認識方法上の差異であって、それはまさに、『国家』における〈線分の比喩〉のディアノイア／ノエシスの差異に

相当する。だとすれば、『国家』において一般に数学に負わされていたディアノイアの機能が、ここでは「釣師」や「機織術」の分割に継承されているのではないか。事実、確かに、これらの分割には、(β)の領域の解明に進む予備練習の役割が課せられているのである。⁽¹⁷⁾そしてさらに、何故これが予備作業たりうるか、という点を遡及していけば、(α)、(β)の基本的な連続性の想定に帰着しよう。「魚釣り」の分割は「ソフィスト」に、「機織術」の分割は「政治家」に比喩的に投影されて、重要な手掛りを提供している。このような実験的比喩は、ふたつの領域の間に一種の同型性がなければ生じえない。してみると、想起説の内包する根本テーゼ、「全事象の本性的連続性」「原範型/似像の世界構造」が、プラトンの後期對話篇においても堅持され、分割法の基本前提をなしている、とここで断言してよいだろう。

一方、『パイドロス』の「エロース」の分割は、(β)のなかでも〈美〉という特権的なアイデアに関わることによって、予備的分割の媒介を要しないものとなっている。

「たしかに〈正義〉といい、〈節制〉といい、またそのほか魂にとつて貴重なものは数々あるけれども、この地上にあるこれらのものの似像の中には、なんらの光彩もない。ただ、ぼんやりとした器官によりかろうじて、それもほんの少数の人たちがそれらのものを示す似像にまで到達し、この似像がそこからかたどられた原像となるものを観得するにすぎないのである。けれども〈美〉は、あのと看、それを見たわれわれの目に燦然とかがやいていた。……〈美〉は、もろもろの真実在とともにかの世界にあるとき、燦然とかがやいていたし、また、われわれがこの世界にやって来てからもわれわれは、美を、われわれの持っている最も鮮明な知覚（＝視覚）を通じて、最も鮮明にかがやいている姿のままに、とらえることになった。」(303B-D)

原初的な欲望は、一方で身体の快楽に向かい、他方で美に向かつて、それぞれ自らのかたちをつくる。この分割を否定しようとすれば、快楽と美との同一性を言うしかあるまい。けれども美の感受は痛みをもともなう。しかしそれ

は、今、見られている美がかつての快楽の残照にほかならぬからではないか。では初めて美にうたれたとき、どんな快楽の記憶があつたのか。〈美〉はわれわれの感性の基底にまで強固な根を張り、感覚的経験の想起性をなによりも鮮かに露わす。

『パイドロス』の分割の場合は、「(われわれに)ただひとり〈美〉のみが、最もあきらかにその姿を顯わし、最もつよく恋ごころをひくという、この定めを分けあたえられた」(300D)という事情が働いて特異なものとなつている。しかし、そのことよつて、『ソピステス』、『ポリティコス』の一見些末な対象の分割を通して、より貴重なものを想起する実験的比喩の途は閉ざされたわけではない。むしろ、この方面の配慮を怠ると或る種の弊害が生じてくる。事実、『パルメニデス』は、〈美〉、〈正〉、〈善〉などの認識にいわば素手で邁進する、若いソクラテスの行手に潜む意外な陥穽を指摘している。また念のため付け加えておくと、ここで実験的比喩と呼んだものに相当する原語はパラダイグマ(範例)であるが、これは「パラダイグマ」の通常の語義であつて、アイデア・原範型を意味するものではない。(α)、(β)に存在論的な階層序列はない、という点をくりかえし強調しておきたい。すなわち、似像は決して原範型たりえないが、範例は似像(比喩)と交換可能である。しかしそれにもかかわらず、原範型と範例の混同は、『パルメニデス』(132C-133A)の誤解にもとづいて、現代のプラトン解釈の一つの根強い傾向を形成している。そこで次に、『パルメニデス』の「アイデア論批評」を考察し、以上の論点を補強しよう。

五 「第三の人間」論とその周辺

—Parmenides 130B-135C

『パルメニデス』の「アイデア論批判」は、何ら有効な反アイデア論を含むものではなく、むしろアイデア論の誤解の根を絶とうとする意図に貫かれ、哲学的思惟のとるべき途を指し示すものである。⁽¹⁸⁾

ここで批判の対象となる「アイデア論」が構えているのは、「一方にアイデアそのものが、他方にそれを分有するものがある」(108B)という図式であるが、それはアイデア論の基本的立場を要約した定式、すなわち「 \langle 美 \rangle 」そのものを除いて他の何か或るものも美しくあるとすれば、それはほかでもない、ただかの「 \langle 美 \rangle 」を分有することによってこそ、美しいのである」(『バイドン』100C)という定式の一つの反響ではある。しかし微妙な差異のあることも見のさせない。なぜなら、この構図は、分有するものがアイデアの分有に先行する感覚的事物としてある、という含みを残すことによって、悪しき二世界論に陥る危険をはらんでいるからである。そしてパルメニデスはまずこの点を、若いソクラテスに試練を課して暴露させている。

その試練の性格は、前章で挙げた(α)、(β)の系列を念頭に置くと、明白になるだろう。

(α)「人間」「火」「水」「毛髪」「泥」「汚物」。

(β)「正」「善」「美」「類似」「非類似」「一」「多」。

若いソクラテスは、「人間」や「水」のアイデアを設定するか否かと問われて曖昧な態度を示し、さらに「毛髪」「泥」「汚物」については、それらがアイデアに根拠づけられてあることを明確に否定し、われわれの感覚に現れる以上のものではない、とみなす。若者はもっぱら(β)の領域に熱中するあまり、アイデアとは独立に存在する感覚的事物を認める結果になってしまふ。しかし、これは生まれる前のアイデア論ではあっても、アイデア論そのものではない。なぜなら、先に挙げた『バイドン』の定式にしても、「何か \langle 美 \rangle 」ということがそれ自体でそのものとしてあり、そしてそれは \langle 善 \rangle にしても、また \langle 大 \rangle にしても、その他のすべてにしても同様である」(100B)というもう一つの定礎と並置されているからである。

このことは『パルメニデス』の「アイデア論批評」の評価にとって決定的である。その種の二世界論の構図をとるかぎり、たとえば、「 \langle 美 \rangle のアイデアを分有する」という事態は、「この人間があり、そしてそれが \langle 美 \rangle を分有する」

とか「この髪があり、そしてそれが〈美〉を分有する」という形をとり、「何か或る主語的事物がまずあり、それが美しいという性質をもつ」という解釈の枠組に不可避的にはまっていく。さらにこれと並行して、「〈美〉のアイデアは美しい(美しくある)」という命題も、「ある」とは何か、が感覚的事物を基準に了解済みのこととされて、解釈されることになる。すなわち、〈美〉のアイデアは、美しいということから切り離された何か主語的なものとしてまずあって、そのうえでそれが美しいという属性をもつもの(*self-predication*)とされ、美しい人や美しい髪のごとき一個の美しいものに類同化(*reification*)されるのである。しかしながら、アイデアを一方では述語的性質ないしは普通に、他方で主語的な実体ないしは個物に割りあてるといった念の入った操作をしておいて、しかもアイデアは「属性の実体化」或いは「普通の物象化」による虚構であるというたぐいの非難を加えることは、おのれの影と争うものにはすぎない。

いわゆる「第三の人間」論(132A-B)の無限背進は、〈大〉のアイデアをそのように多数の大きな感覚的事物とパラレルにとらえることから始まる。何故にこれがそのような構図にはまったのか、そしてまた何故、若いソクラテスはこれに有効な反駁をなしえなかったのか、ということはすでにわれわれには明らかである。

とはいえしかし、若いソクラテスが「第三の人間」論に対して示した反応とバルメニデスの再批判とからは、この問題に関するプラトン自身の重要なコメントが抽きだせよう。

- (1) アイデアは概念(*noyeta*)であるか(132B-C)。
- (2) アイデアは原範型であるか(132C-133A)。

(1) アイデアのものへの類同化を斥けるとき、これを普遍概念と同定しようとする誘惑に抵抗することは、おそらくかなり難しいであらう。しかし、アイデアをそのように解すれば、まず第一に「分有」ということは完全にその意味を失う(132C 9-11)。第二にまた、もともと概念とは、実在との関係をひとまず保留し、夢と覚醒の区別を意識的に消

すことよって構成される作業仮設である。したがって、概念も最終的には真偽が問われるのであって、それ自身の対象から独立に存在することはできない。(132B7-C2)。

だが何故、その概念の対象がアイデアであって(132C 3-5)、感覺的事物の集合であってはならぬのか。「今、見られているこのものは、或る別のものごとくであろうとしているのだが、しかし欠けるところがあって、そっくりそのままであることができず、劣ったものにとどまっている」(『バイドン』註(19)B)からである。

(2) しかし一方、アイデアの物象化に対して何らの歯止めもない二世界論的図式のもとで、アイデア・原範型としてみても、結局アイデアは模範的なもの、すなわち一個の範例とみなされるだけに終わる。原範型と似像との関係は、同型性によって架橋された相称的な類似関係に置換されてしまうのである。⁽¹⁹⁾

したがってまた、自明のことではあるが、次のことはやはり言うておく必要がある。この議論は、 $\text{ヘイデア} \parallel \text{原範型} \nabla \text{論を否定するものではない}$ 。プラトンはこの論法を意識的に誤った形式で組み立てることによって、その点を明確に示している。もともと「分有」を説明すべく、原範型／似像の関係が導入されたにもかかわらず、再びそれが「分有」に置き換えられているからである。⁽²⁰⁾ すなわち、分有 \downarrow 似像／原範型 \downarrow 類似 \downarrow 分有 \downarrow ……という無限循環が、「分有」の成立のために無限に多くのアイデアの動員を要求する。しかしこれは、アイデアの「分有」という事態を、さらに別のアイデアの「分有」によって説明することはできない、という至極当然のことを言うにすぎない。⁽²¹⁾

こうしてみると、「第三の人間」論はかえってアイデア論を逆照するものである。とすれば、それに先行するもう一つの「分有のアポリア」(131A-B)も、アイデアの擬物化による粗雑な議論というだけに尽きるものでなく、正式のアイデア論的観点から見直す余地があるかもしれない。

さて、全事象の根底にアイデア・原範型を想定するということは、独立にそれ自身として存在する感覺的事物を解消

し、いったんは個物を似像の束に解体するということにもなる。このとき、「一なるアイデアを多数の感覺的事物が分有する」という図式は、多くの場所で似像Aが似像B、C……と或いは結びつき、或いは結びつきを拒んで現れる、ということに帰着する。したがって、「へ大」のアイデアが、多数の感覺的事物による分有において断片化する」(310-D)というアポリアは、それ自体としては全然問題を含まず、ただ「一」「多」「大」「小」「等」などのアイデア相互間の結合と分離という局面に移行する。そしてこれが『バルメニデス』第二部(189ff.)でなされている予備練習(*Proparata*)である。それは予備練習の眼目として、ディレンマ構成による背理を導いて思考に刺戟を与えるため、仮設法の形式をとっているが、アイデア相互の連結(一つになる方向)と排除(多に分かれる方向)とを見るところで、本質的には分割法と同じものである。

六 集 約

前章での『バルメニデス』の「アイデア論批判」の検討によって、アイデア・原範型と範例とは決して混同されないこと、またアイデア・原範型があらゆる事象に似像のかたちで浸透しているものであること、が再確認された。このようなアイデア論的脈絡において、分割法とは、『ピレポス』(16D sq.)の「音階の形成」(*hōurekē*)と「音韻組織の発見」(*trōnikē*)とにそのモデルがみられるように、最終的にはアイデア相互の連結と排除の関係を吟味することにより、似像の束に解体した現象に秩序と構造を発見し構成する仕事であるといえよう。

最後に、分割法(分割と総合)の仕組についてのこれまでの考察を要約し、アイデア論的文脈とのつながりをコメントしておきたい。

(1) 発語装置

これは類似の中に対立的差異を見いだすことをその基本操作とする。この分割は、最初の総合的直観に支えられ、これをより包括的な場に拡張した上で、分節化し言表化して対象への直観をより明瞭なものとする（以上、第2章）。ここで、分割法の適用対象の身分を、個物（particulars）でなく類・種（22）のクラスとみなして、最初の総合を「雑多な感覚から出発する」アイデア想起との連絡を断とうとするような解釈には何らの根拠もない。そもそもアイデア論では、個物と類・種（普遍）という対比が意味をなさない（第5章）。分割法は（弱い）想起にはじまり、この想起をより鮮明にする方法である。

(2) 選別

『ソピステス』の「ソフィスト」、『ポリテイコス』の「政治家」の分割の核心は、真／偽、真／賤の分割にある。そしてその分割の基準は、正・邪、善・悪の〈知〉であって、それはアイデア論そのものに依存している（以上、第3章）。したがって、この連関で後期対話篇『テアイテトス』（151E-183B）の考察のもつ意味は重（23）い。

(3) 実験的比喩

全事象の基底には原範型としてのアイデアが想定される。従って、われわれの経験に現れる些末な事象といえども、これをロゴスに分節して再把握し、比喩的な投影を試みることによって、より貴重なもののアイデア認識の手掛りが与えられている。後期対話篇において、分割法Ⅱディアレクティケーの提示に際して、『国家』で強調されていた数学的方法との対比が欠けているのは、ディアレクティケーの意味を顛倒するものではなく、比喩の方法（同型性の発見）が数学をカヴァーし、かつまたディアノイアからノエシスへの移行をも果たしうるからである（以上、第四章）。

そして、アイデア・原範型論の基本線がそのまま分割法の根本前提として据えられているかぎり、どのような分割も、究極的に〈善〉のアイデアの直観によって補完されるまでは、或る程度、形式性、仮設性をも帯びている。「ソフィスト」や「政治家」の分割もまた、それだけで自己完結するものではなく、ディアレクティケー一般に習熟し、事柄の

実相に迫るための活動の一端にすぎないのだから(『ポリテヤノス』285D, 287A)。(一)

注

(一) 関連箇所は『メネキュノシス』111B-112D, 『エウパトモノン』7B-D, 『國家』523A-524D, (J. Adam, *The Republic of Plato*, vol. II, p. 110, 523D (23)) 藤沢令夫訳『國家』(『ヘラクレイトス全集』11) 岩波書店) p. 513 注を参照) 『メテュロス』250 B-D, 263 A-C, 『メネキュノシス』130 B-E, 『ポリテヤノス』285 D-286 B, 参考として『メネキュノシス』235 D-236 B, 『メネキュノシス』のイデア論批判がイデマ・原範型の想定に有効な打撃を与えてくれるとみなす立場から、この問題と触れた論文として(私は賛同しないが)

G. E. L. Owen, "A Proof in the *Peri Ideon*," *Studies in Plato's Metaphysics* (ed. R. E. Allen), 1965, esp. pp. 305-310.

C. Strang, "Plato and the Third Man," *Plato*, I (ed. G. Vlastos), 1971, esp. pp. 194-199.

イデア論の端緒を照らす、より重要な論文は

松永雄二「知と不知について」(九州大学哲学論文集第11輯)

(2) 拙稿「想起説の導入状況——『メノン』の場合」(『古代哲学研究』IX, 1977)

(3) 拙稿「イデマ・原範型の消滅」(『理想』一九七九年九月号) p. 113-117)

(4) R. S. Bluck, *Plato's Meno*, 1961, pp. 106-108.

R. Hackforth, *Plato's Phaedrus*, 1952, pp. 135-136.

W. D. Ross, *Plato's Theory of Ideas*, 1951, pp. 118-119.

(5) *Fragmenta Comicorum Graecorum* (ed. Meinecke) pp. 682-683.

(6) G. Kyle, *Plato's Progress*, 1966, Chap. IV.

これらについては、テュヌット調査をめぐった周到な反論がある。

- J. L. Ackrill, "In Defence of Platonic Division," *Ryle* (ed. O. P. Wood and G. Picher), 1970, pp. 373 sqq.
- (7) Diogenes Laertios. VI, ii. 40.
- (8) 推しよむ註釋家金未記『ソフィストク』(『ソフィスト全集』邦訳書肆) p. 172 標註云々参照。
- (9) 『ソフィストク』(258E) の技術の分割を参照。
- (10) 『ソフィストク』385E-387B、ソレヲ 386D-387A を参照。
- (11) 語彙の分類云々
- R. Hackforth, *Plato's Examination of Pleasure*, 1945, pp. 142-143.
- (12) R. S. Bluck, *Plato's Sophist*, ed. by G. C. Neal, 1975, p. 40.
- (13) *Analytica Priora*, A 31, 46^a 31 sqq.
- (14) W. D. Ross, *op. cit.*, p. 118.
- (15) K. M. Sayer. *Plato's Analytic Method*, 1969, pp. 149-157. ソレヲ... the very fact that this diversity appears under the category of *acquisition* suggests that being acquisitive is not essential to being a Sophist. ... the fact that the several Sophists share *only* acquisitiveness among their features, but share none of its more specific forms, suggests that this was the wrong branch along which to pursue the essential Sophist in the first place. (p. 156)
- (16) τὰς αὐτῶν ἄρτων ἰσθίως καταμαθεῖν αἰσθητὰς τὰς διατάξεις πεφύκασι (285E).
- Flonius (Terum quarundam cognitio facilium) は此のソフィストの註文を以て「ソフィストは其の知識の容易なるに在る」と内容の記述を大差なく説明す。
- (17) 『ソフィストク』218C-D, 221C.
『ソフィストク』286B sqq.
- (18) この問題については、著者なごうす。
- N. Fujisawa, "'Eyes, Meteyes, and Idioms of 'Paradigmatism' in Plato's Theory of Forms," *Phronesis*, vol. XIX,

(1974), pp. 30-58. 「邦文『イデアと世界』(岩波書店) 第三章」
以下の論述は、この論文に依拠する。

(19) イデア論を擁護しようとする人々 (Taylor, Cornford など) は原範型/似像の関係を、似像は原範型に似ていてもその逆はありえない「非相称的類似」関係に同定しているが、これは反対の陣営にある人々からは純粋に論理的関係に存在論的派生関係を忍びこませたものと論難されている。

cf. G. E. L. Owen, "The Place of *Timaeus* in Plato's Dialogues," *Studies in Plato's Metaphysics* (ed. K. E. Allen), 1965, p. 150.

しかし「非相称的類似」の概念が論理的誤謬というのとはあたらな。近似と極限、或いは楕円と円の関係を考えよ。

(20) N. Fujisawa, *op. cit.*, pp. 49-50 (邦文 pp. 124-125).

(21) しかしこのこと自体は、「いかんして感覚的似像がイデアより派生するか」という問題を投げかける。究極的には、これは宇宙生成論 (*cosmogonia*) を要請する問であって、イデア論に固有な謎ではない。プラトン自身は『ティマイオス』において *δημιουργός* の導入によって、それに答えることになる。これは、「分有」論が *φύσις* の場で解かれるべきものであることを示している。

(22) ハックフォースは分割法を類・種(概念)の分類とみなしたために、『ヒレポス』の分割法の解釈で破綻をきたしている。

R. Hackforth, *Plato's Examination of Pleasura*, 1945, pp. 24-26. cf. J. C. B. Gosling, *Philebus*, 1975, pp. 160-163.

(23) そのエスキスは

藤沢令夫『ギリシア哲学と現代』(岩波新書) pp. 135-137.

* この論文は、一九八〇年の関西哲学学会(十月二十五日、立命館大学)において読みあげられた原稿にもとづく。

* 文中の引用は、岩波版プラトン全集に準拠する。

(筆者 といけ・すみお 京都大学文学部〔西洋古代哲学史〕非常勤講師)

of a phenomenological perspective on ‘sympathy’ derived mainly from Scheler, and an emphasis on the constitution of social action through subjective meanings derived from M. Weber. Our theorizing on them refers to the empirical discipline in its concrete problems. So it must be followed by the sociological investigation viewing from the social formation approach.

Platonic Division Reassessed

Towards the Fundamental of Plato’s Later Dialogues

by Sumio Koike
Lecturer of Greek Philosophy,
Faculty of Letters,
Kyoto University

It is in the *Phaedrus* that Plato for the first time formally introduces the method of division (and its reverse procedure, collection), which from then onwards constructs frames of his later dialogues such as the *Sophista*, *Politicus* and *Philebus*. While the method is explicitly identified with dialectic or philosophy, most interpreters have entertained that the “dialectic” is not same as in the *Respublica*, Plato’s masterpiece written before the *Phdr.* Their alleged reason was: the method of the *Phdr.* is but a classification *per genera et species* and then does not aim at the cognition of the Form of the Good conceived as the source of all being and all knowledge.

In this paper, however, I attempt to demarcate the characters of Platonic division and locate it in the context of the theory of Forms (Paradigmatism).

First, I conclude from the observation of the “angler” division (*Sph.* 219a-221c) that the role of collection must be supposed in the following steps, a) the original response to the Socratic “What is X ?” question, that collects X’s particular instances into one form, b) the enlargement by which many similars to that form make up together one domain, c) the reverse operation of division in the sense that to separate is at the same time to gather.

As for division, its performance assumes three phases, 1) as an enunciational apparatus, 2) as a selection, 3) as a heuristic projection or metaphor.

1) In virtue of the revelation of differences among similarities the division proceeds paring the parts from which the definiendum X is absent, and ultimately sights the property of X. It is, therefore, an apparatus by which the original collection a) is articulated and enunciated.

2) This is indicated in such passages as the *Sph.* 226d and *Plt.* 303d. For their ground, these divisions require the knowledge of the just or good, which is the main motive of Plato’s Paradigmatism. The puzzle of “sophistry of noble family” (*Sph.* 226b-231b), I esteem, can be resolved in this place.

3) In the *Phdr.* and *Plt.* as well as in Plato’s earlier writings, the *methodological* distinction is drawn between D-things and S-things (as C. Strang calls them). The division of S-thing (e.g. angler, weaving) admits of being projected into the range of D-thing (e.g. sophist, statesman) and aids their cognition. Here the same assumptions as Plato’s Paradigmatism will be detected through the scrutiny of the *Plt.* 285d-286a.

Finally, in order to reinforce this argument, I make comments on the

so-called "criticism" of the theory of Forms in the *Parmenides* 130b-135c

Subjekt und Spontaneität

— Das Grundproblem der Leibnizschen Metaphysik

von Kiyoshi Sakai
Postdoctoral Fellowship Student
of Japan Society for the Promotion of Science,
Kyoto University

Die vorliegende Arbeit stellt sich die Aufgabe, den metaphysischen Grundgedanken Leibniz' in Hinblick auf seinen Begriff des „Subjekts“ als der „Monade“ herauszustellen. Von der Frage nach den konstituierenden Elementen der Dinge überhaupt ausgehend, gelangt Leibniz zum Begriff der „einfachen Substanz“, d. h. der „Monade“. Warum aber diese einfache Substanz bei Leibniz in ihrem primären Sinne als die Seele, das Subjekt verstanden werden soll, erklärt sich wie folgt: die Wesensbestimmungen der einfachen Substanz, nämlich „Unteilbarkeit“ und „Unabhängigkeit“ findet Leibniz vor allem im menschlichen Subjekt, und zwar wegen seiner „Spontaneität“, seines erkennenden, wollenden Handelns selbst.

Der Titel dieser Schrift heißt „Subjekt und Spontaneität“. Dieser besagt: *das Subjekt aus der Spontaneität zu verstehen*. Leibniz grenzt seinen Begriff des Subjekts gegen jenen empirischen Begriff eines passiv wahrnehmenden, bzw. bloß rezeptiven Subjekts insbesondere bei dem damaligen englischen Empiristen, Locke streng ab. Und er versucht die Wesenscharaktere des Subjekts gerade in diesem Begriff der Spontaneität oder der Selbsttätigkeit zum Aufweis zu bringen